

「わたしにつながっていなさい」

ヨハネによる福音書 15:1-10

教会の暦によると、今日は「収穫感謝日」です。この行事はもともとアメリカの教会から始まったもので、今から 400 年ほど前、イギリスから信教の自由を求めてアメリカのプリマスに移住した「清教徒」と呼ばれる人たちによって始められたのが、その起源だと言われます。彼らは新しい土地を耕して、本国から持ってきた穀物や野菜の種などを植えましたが、最初の年は、何も実らなかったために、半数ほどが寒さと飢えで命を落としたそうです。それを見かねた先住民の人たちが、その土地の農作物の種や苗を与えて、指導し助けてくれたお陰で、翌年にはかなりの収穫を与えられて、生きる希望を与えられたそうです。入植した人たちは、その収穫を感謝して、先住民の人たちを招いて、共に感謝の祈りとお祝いのときをもったのです。そのようにして始められた感謝祭が、日本の教会にも伝えられて、毎年、収穫物の一部を持ち寄って、神さまに感謝する礼拝を守るようになったと言われます。

私たちは、直接農業に携わっているわけではありませんが、農家の方々の労苦により、今年も多く収穫が与えられました。そのことを感謝し、すべての良きものを与え、良き道を備えてくださる主なる神さまのみ名を共に賛美したいと思います。

パウロは、コリントの信徒への手紙(1)の中で、「わたしは植え、アポロは水を注いだ、しかし成長させてくださったのは神です」(3:6)と述べています。これは、教会の成長を農作物の成長に譬えた言葉ですが、神さまは、人間の働きや努力を用いて、すべてのものを成長させてくださいます。私は、この数年、猫の額ほどの小さな庭に、キュウリやトマト、なすなどを植えて収穫を楽しんでいます。私はそれほど熱心に世話をしているわけではなく、時々水をやる程度ですが、それでもそれらの野菜は成長し、時期が来ると花を咲かせ、実を結び、実が熟します。その成長の過程をとおして、ほんとうに育ててくださるのは神さまだ、ということを実感しています。

イエスさまは、種まきの譬えや、麦と毒麦の譬え、からし種の譬、成長する種の譬えなど、多くの農作物の譬えを用いて、「神の国」について語られました。それらの譬えはどれも、小さな種が知らぬ間に大きくなり、多くの実を結ぶという「成長」に関わる譬えです。イエスさまは、それらの譬えを通して、どんなに小さな種でも、それが良い地に落ちると、30倍60倍100倍にもなるという、成長を例に、神の国(神さまの支配)は、目には見えなくても、着実に進展しているということを示されたのです。イエスさまは、そのような譬えによって、主に従う小さな群れに、「恐れるな。あなたの父は喜んで神の国をくださる」(ルカ 12:32)という慰めと励ましを与えておられるのです。

さて、今日の聖書の箇所は、有名な「ぶどうの木の譬え」です。この譬えも、ぶどうの木がどのようにして成長し、実を結ぶようになるのか、を示すことによって、主に従う者の基本的なあり方を教え示しているのです。

「ぶどうの木」は、パレスチナ地方の至る所に植えられている木で、旧約聖書においては、神によって選ばれたイスラエルの民を象徴する木として描かれています。例えばイザヤという預言者は、「ぶどう畑の歌」と呼ばれる歌の中で、「わたしの愛する者は、肥沃な丘にぶどう畑を持っていた。良く耕して石を除き、良いぶどうを植えた。その真ん中に見張りの塔を建て、酒ぶねを掘り、良いぶどうが実るのを待った。しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった」(5:1-2)と詠っています。これは、神さまが、イスラエル民を選んで、エジプトの奴隷の地から解放し、乳と蜜の流れる約束の地に導き、至れり尽くせりの愛を注いだのに、民は神の期待を裏切り、良い実を結ばなかった、という神の嘆きを詠った歌です。

イエスさまは、おそらくこのような預言者たちの言葉に基づいて、「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」と語られたのではないかと思います。つまり、イエス・キリストに従う弟子たち及びその後の教会は、神によって新しく選ばれた「神の民」だ、わたしたちこそ「まことのぶどうの木」である、ということです。

1節でイエスさまはこう言われました。「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっているが、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる」。神さまは、キリストを中心とした小さな群れが、豊かに成長して、良き実を結ぶことを期待して、自ら農夫のようになって、枝を剪定したりして、手入れをなさるといいます。教会の成長ということは、単に教会が大きく枝を伸ばして勢力を拡大することではないのです。むしろ枝を剪定して「良い実を結ぶ」ことです。「良い実」とは、神さまのみ心に従い、愛と真実とをもって世に仕え、主のみ心を行うことです。私たちは、どうしたら神さまの期待に応え、良い実を結ぶことができるのでしょうか。

「わたしはまことのぶどうの木」と言われたイエスさまは、5節で「あなた方はその枝である」と語られ、「人がわたしにつながっており、わたしもその人とつながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである」と言われました。ここで、イエスさまは、ご自分と主に従う者たちとの関係を、ぶどうの幹と、枝との関係に譬えて、イエス・キリストにしっかりと「つながっている」ことの大切さを強調しておられるのです。ぶどうの枝は、自分だけで実を結ぶことはできません。枝はその幹であるぶどうの蔓(つる)にしっかりとつながり、木の樹液にあずかり、そこから命を得ることによってのみ、豊かな実を結ぶのです。どんなに立派な

枝であっても、幹から離れたり、そのつながり方が中途半端だと、木の養分が十分に枝の先に届かずに、実を結ぶに至らないのです。

私は金沢の教会に居たころ、ぶどうの苗を教会員から頂いて、教会の庭の片隅に植えたことがあります。妻が肥料をやったり水を注いだりして世話をして、ぶどうの実がなるのを楽しみにしていました。たしかに木は大きく成長し枝も立派に伸びましたが、何年たっても実を結ばず、そのうち次第に元気を失って枯れてしまいました。その幹を切ってみると、幹の中に虫が巣を作っていて、水や養分を吸い上げる導管の部分が空になっていました。外観がつながっていても、中がつながってなければ、何にもならないのです。私たちと、イエス・キリストとの関係についても同じです。

イエスさまは、「わたしを離れては、あなたがたは何もできない」と言われました。私は、この言葉にハッとさせられたことがあります。ある教会でのことですが、やることなすことが、どうもうまくいかず、「こんなに一生懸命にやっているのにどうしてか」と悩んだことがありました。そのとき、このみ言葉に出会って、「私は自分の正しさや自分の力に頼って、頑張っているつもりでいたが、どれだけ祈って、主に信頼し、主のみ心に従っていたか」と反省させられました。心がキリストから離れていたために、空回りしていたのです。「キリストから離れたら、何もできない」ということを深く反省させられました。

「わたしにつながっていなさい」。イエスさまはここで、何度もこう繰り返して言われました。「つながる」と訳されているこの言葉は、「留まる」とか、「宿る」とも訳される言葉で、内的な深い結びつきを意味する言葉です。パウロはガラテヤの信徒への手紙の中で、「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです」(2:20)と語っています。ぶどうの木「幹」と「枝」との関係で、イエスさまが語っておられることは、このようなイエス・キリストとの親密な交わりを意味する「つながり」なのです。

それでは、私たちが、イエス・キリストとつながるといふことは、どういうことでしょうか？ イエスさまは、この先の16節で「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るように」と述べています。まずなによりも、イエス・キリストの選びと招きにお応えするということです。それは具体的には、「洗礼」を受ける、ということではないかと思えます。洗礼は、イエス・キリストの十字架の死と復活の恵みを、自分のためのものとして受け入れ、その恵みに応えて生きることです。

パウロはその洗礼について、ローマの信徒への手紙の中で「キリスト・イエスに結ば

れる」(6:3)ことと説き、「キリストと共に死んで、キリストと共に生きる」(6:8)ことだと表現しています。つまり自分中心に生きてきた古い自分に死んで、キリストと共に生きる新しい人として生まれ変わることだ、というのです。キリストという木に接ぎ木された私たちは、キリストの命の樹液にあずかって、新しい命の息吹を与えられて、青々とした葉を茂らせ、良き実を結ぶようになるのです。

こうして、洗礼を受けることから、キリストと共なる新たな歩みが始まるのです。ですから洗礼を受けるということは、信仰生活のゴールではなくスタートなのです。すぐに良い実を結ぶわけではありません。それどころか、せっかくキリストに結ばれたのに、そのつながりがゆるみ、キリストがぼやけたり、命の樹液が乏しく感じられたりすることがあると思います。毎日のあわただしい生活の中で、キリストとのつながりよりも、この世とのつながりや思い煩いに心を奪われ、以前の古い生活に逆戻りしそうな誘惑を覚えるようなことがあるかもしれません。しかし、私たちがそのような動揺し、気がゆるむことがあっても、キリストは私たちをしっかりと捕らえて、支えてくださるのです。私たちが洗礼を受けたということは、私たちがキリストによって捕らえられて、「キリストのもの」になったということを意味します。私たちがぶれてもキリストはぶれないのです。たとえ私たちの気が緩んで、つないでいた手を放してしまうことがあっても、キリストは私たちの腕をしっかりと捉えていてくださるのです。「わたしにつながっていなさい」と語られる主は、「わたしもあなたがたにつながっている」(4節)と言われるのです。私たちが受けた洗礼は、水と霊による洗礼です。水によって清められると共に、イエス・キリストの霊、聖霊が私たち内に注がれるのです。

宗教改革者のマルチン・ルターについて、このようなエピソードが伝えられています。宗教改革という大変な闘いの中で、彼もしばしば疲れを覚え、気が滅入ってしまいそうになることがあったようです。そんなとき彼は、サタンが目の前に現れて、自分をそそのかしているような気がして、サタンめがけてインク壺を投げつけたそうです。今でも彼の書斎の壁にその時のインクの染みが残っているそうです。信仰の闘いをしていくとき、そのようなサタンの試みに合うようなことがあるのです。彼はまた、そのような誘惑にかられた時、自分の机にチョークで「わたしは洗礼を受けている」、「わたしは洗礼を受けている」と何度も書いて、その試みに打ち勝ったと伝えられています。

「洗礼を受けている」という恵みの事実は、「キリストのもの」としての自覚を促し、自分の弱さに打ち勝ち、悪しきこの世のもろもろの力と闘い勝利する力を私たちに与えるのです。激しく揺れ動くこの時代の中で、一人一人が、この共におられる主キリストにしっかりとつながり、どんなときにも流されずに、主の愛と恵みに応え、良き実を結ぶぶどうの木として、共に成長し、神さまの栄光を現わす者でありたいと願います。